
完全敗北

葉月茉莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全敗北

【Nコード】

N4810M

【作者名】

葉月茉莉

【あらすじ】

俺、おかしいんやろうか？

親友を好きになるなんて。

あかん、こんな気持ちは。

隠しとおさな。

俺はお前の傍におられへん。

親友でおらなあかんねん。

戸惑う心……その行く先は―――。

エロ入ります。

苦手な方はご注意ください。

2010.07.09 執筆開始

1 (前書き)

この作品は、ボーイズラブとなっております。

嫌悪感を抱かれる方、もしくはボーイズラブの意味の分からない方は、回れ右推奨です。

H大学法学部に通う菱沢一意には、ずっと片想いの好きな人がいる。

その好きな人は、杉山透と言い、一意の友人で男だ。同じ男を好きになるなんて初めてのことで。

始めはどうしていいか戸惑った。

行き過ぎた友情なだけなのかもしれないと思うとした。

けれど、やはりそれは間違いで。

初めて自覚したのは、自慰の際、透のことを思い浮かべてしまった時だった。

その時は、ひどく動揺したのを覚えている。

自分でも驚いたけれど。

友達のことをそんな目で見ている自分が最低だと思った。

それでも、好きになってしまったものは仕方がない。

そう言うのもありかと、自分の気持ちを受け止めた。

でも、透のことを知るうちにどんどん惹かれていくのがわかる。

知り合ったきっかけは、透から声を掛けられたこと。

たまたま、自動販売機のジュースを買ったところ、前に買った人が取り忘れていたため、一意の買ったものが引っかかり出てこなくて。

自販機の前で悪戦苦闘していると、

「とれへんの？」

そう声を掛けられた。

それが、透との出会いだった。

透のことは、知り合う前から気になっていた。

社会学部に秀才が居ると、法学部でも耳にすることが多く、他学部まで噂が流れるほど頭が良いなんてどんなやつだろう？　そう言う程度の興味は持っていたのだ。

また、それと同時にひどく愛想のないクールな奴、などあまり良いとは言いがたい噂も同時に耳にした。

まあ、中には誉め言葉として、格好良いって言うのも混じっていたけれど。

でも、実際逢ってみたら想像と全く違った。

……なんと言うか。

もつと、とっつき難いやつだとばかり思っていたのに。

やっぱり、噂なんていうものは、あてにならないものだと言感した。

知り合う前には、クール・冷たい・無関心・頭が良い・格好良い。透に関してはそんな、形容詞しか耳にしなかった。

頭が良くてかっこ良くて、クールと来たら。

簡単にはお友達になてなれないだろうな。

と、そんな漠然とした考えを持っていたのに。

実際に逢ってみたら、本当に全然違った。

——ほんまに、かっこええよな。

一意は、目の前で、ランチを食べている透の顔をじっと見詰めた。いや、見惚れた。

かっこいい男は、何をしてもかっこいいのだと目の前の透を見て痛感する。

透の服装は、ジーンズにアイロンのかかっていない皺だらけのシャツで。髪の毛は、切りに行く時間が無いからなのか伸びたままで。それでも、見惚れるほどにかっこ良い。

一意は、今までかっこ良いなんて言われたことは一度もない。も

ちろん自分でもそう言った部類に入らないことは良く分かっている。童顔の所為か、かわいいと言われることはあっても、間違ってもかっこ良いなんて言われたことはなかった。

同じ男なのにこうも自分とは違うのかと思う半面、素直に、自分にはないものを持っている透のことを羨ましいと思う。

それに、ここまで自分と差があつては羨ましいとは思っても嫉妬する気も起こらない。

しかも。

ただ、格好良いだけではなく、透は頭も良くて、話をしていても楽しい。

知らないことは何も無いんじゃないかと思うほど物知りだ。

知り合つて一年ちよつと。

初めは、どちらからとも無く、待ち合わせてお昼は一緒に食べるようになった。

それが、段々一緒にいる時間が増えていつて。

学部も違うのに、一番の親友と言えるほど仲良くなった。

知れば知るほど、透は魅力的な男で。

気がつけば、一意は、透に恋をしていた。

男同士で、恋人になるとか、振り向かせるのなんて、無理なことばかりわかつているし、付き合いたいとか、恋人になりたいとかそう言う考えはない。

だから、一意はただ、透の一番の親友になろうと思う。

第一、男である自分になんて惚れられたって、透だって気持ち悪いだけだろう。

一意だって、逆の立場ならきつとそうだと思う。

「そんなに見ても何にもやらんで。それとも、もうお腹一杯なんか？」

透は、さっきから、食の進まない一意のトレーを指した。半分以上、まだ残ったままだ。

「一意……?」

黙ったままの一意に疑問を持ったのか、さつきから、ぼうつとしたままの一意の顔を覗き込んだ。

呼びかけても返事はない。

透の問いかけも聞いているのか分からない。

透は、そんな一意の頭に手を置いた。

くしゃりと、髪の毛を掴む。

時々透はそんな風に、一意の頭を優しく撫でる。

まるで、小さい子をあやすような行為。

子ども扱いされているみたいで、される度一意は少しむっとうとしてしまう。

そうやって、頭を撫でられるたびに、初めの頃は子供じゃないんやからと怒っていた。

いくら一意が言っても全然やめてくれないので、なんでそんなことするのか、一度理由を聞いたことがあった。

透の答えは、『一意の髪が柔らかくて気持ち良いから』という、理由になっているのかいないのか。なんだかよく分からないものだったけど。

でも、そう言ったときの透の顔が。

なんていうか幸せそうで。

怒っていた筈なのに。

それ以上、一意は何も言えなかった。

透に、頭を撫でられて。

やっとう一意は我にかえた。

2

「……あ。透？」

「ん？ なんやねんな？ ぼうっとして。具合でも悪いんか？」

透の端正な顔が近付いて来て。

顔を覗き込まれた。

それだけのことなのに、胸がときどきした。

——重症だ。

「いや、なんでも……」

目が合って、一気に顔が火照る。胸がとくと高鳴った。
自分を見詰める心配そうな透の瞳に、動揺する。

「顔、赤いじゃん？ 熱でもあるんちゃう？」

透のひんやりとした手が額に当てられる。

透の少し無骨な手が触れていると思うだけで、一意の顔がますます赤くなる。

……ああ、俺ほんまに重症や。

それは、お前の所為やっちゅうねん。

心の中で一人突っ込み、一意は何でもないから、と首を横に振った。

本当に。

透と目が合っただけで、顔火照るなんて重症だ。

一意は、ふうつと軽く溜息を吐いた。

この先、透と親友のままで居られるのか不安だなと言う考えが、ちらつと頭の奥を掠めた。が、そんな不安は頭の片隅へ押しやることにする。

——親友。

この位置が一番良いんやと、一意は自分を納得させる。

透の傍に居ることが出来るのだから。この位置だけは、誰にも渡すつもりはない。

男である一意には、親友という立場までが、精一杯だ。これ以上なんて望めない。

そんなことは、分かりきっている。

「ま、馬鹿は風邪引かないって言うしな」

そう言って、透は一意の額へと置いた手を引っ込める。

「関西人に向かって馬鹿って言うなって。それ禁句やで。いつつも言うてるやんか」

なぜか、透も関西人なのに、時折「あほ」ではなく「馬鹿」と言う。

なんでも、両親が関東の人らしい。

だからか、ところどころ、透の関西弁はちょっと可笑しなことになるときがある。

離れていく透の手を寂しいと思いながらも、口ではいつものように文句を言う。

そんな風に一意が透に抗議すると、くすりと笑われてしまう。こんないつもの会話にほっとするのも本当。

決して、男の自分では恋人になれないのが寂しいのも本当のことだ。

恋人に。

透の特別に、なりたがっている自分に改めて気づかされる。

あかん、あかん、あかん。欲張ったらあかんのや。

そんな想いを胸に、なんて自分は欲張りなんだと、一意は少し自己嫌悪に陥る。

「一意。お前、次は空き時間やったよな？」

「うん。そうやけど。なんかあるんか？」

透が、一意の時間割を把握してくれていたことに驚きつつも、素直に嬉しく感じる。

不思議と透は、一意以外の他人とは、距離を置いている。

なぜかは、分からないが、一意以外の人間と話しているのを見かけたことがない。

大抵は、一人でいるか、一意といるかのどちらかだ。

講義も一人で受けているようだし。

なんでそんなに他人と距離を置くのか、一度聞いてみたことがある。

返ってきた答えは簡単なものだった。

「面倒やから」

あまりな答えに、一意は空いた口が塞がらなかったのを覚えている。

「面倒やからって、……お前な」

もっと言い方があるやろ。

そう講義したけれど、笑ってかわされただけで。

こうして、傍に居るのも必然的に一意だけとなっている。

そんな透が、一意の時間割なんてものを覚えていてくれた。

まるで特別扱いされているようだ。

そう思うと優越感さえ感じた。

自然と頬が緩む。

「俺も空きやねん。俺は図書室へ行くつもりやけど？」
どうする？

そう聞かれて、もちろん行きたいが。

「邪魔やない？」

透は空き時間などは一人で図書室にすることが多く、一人でいたいこともあるだろうし、いつもいつもくっついていては迷惑ではと思うので、一応聞いておく。

透の答えは分かっているが、念のための確認。

「邪魔なら、誘わへん。それで、行かへんのか？」

「行くに決まってるやん」

一意は元氣良く返事して、残りのご飯を食べきった。
食後、二人で連れ立って図書室へ向かう。

この大学の図書室は食堂からそう離れてはいない。

社会学部の秀才として有名な透と、何の取り得もない、少なくとも一意は自分のことをそう自覚している、しかも学部も違う一意の組み合わせは、人目をひくらしく、「どこへ行くんや？」と途中で何人かに声を掛けられる。

全く雰囲気の違いが二人が一緒にいることが周囲には不思議でならないのか。

どちらかと言えば、透は硬質な雰囲気を持ち主で。一意は癒し系だ。

一意もまた違った意味で、大学内では有名なのに本人は気が付いていない。

一緒に居るととにかく声を掛けられやすいことに、一意は気が付いていた。

いつも一人で居る透が、一意と一緒にということもあり、声を掛けやすいのだろう。

皆、社会学部きつての秀才には、興味があるようだ。

その度に、一意は「内緒」と返事をする。

一度正直に答えて。

じゃ、俺も一緒に。と付いて来られたことがあって懲りたのだ。

その時の様子は、今思い出しても、背筋が凍りそうな思いがする。

透の機嫌が、嘗て見たこともないほど悪くなり、付いて来た友人も、やっぱり透は怖いやつと認識し、法学部の間では、透は怖いやつとの意見が定着してしまった。

一意が透はそんなやつじゃないといくら言っても、誰も一意の意見には耳を貸してくれなかった。

透のことを誤解されて、一意は口惜しかった。それで、教えないことにしている。

さつきから、何人にも声を掛けられて、

「やっぱり良く声を掛けられるよな。お前」

そう、透がやや呆れた風に言う。

「ああ。そうやなく。なんか、透と居てるのが不思議やと思われてるみたいやねん。ほら、俺ら、見た目も性格も全然違うし。面白がられてるんやろな」

「声を掛けられる理由は、他にあると思うけどな。分からへんのか？」

透に瞳を覗き込まれて、問い掛けられる。

そんなこと聞かれても。

多分、透と自分とは全く違うタイプなので、なぜ仲が良いのかみんな興味を持っているだけだろうと、一意は考えていた。それから、一意を通して透と話してみたいのか。そのどちらかだと。だから、透が他に理由があると言っても、一意には思いもつかない。

他にあるって……？

面白がられているのとは違うのだろうか？

不思議そうに首を傾けた一意の頭に、透は手を載せて、くしゃりと髪の毛を掴んだ。

「あ、また。子ども扱いして」

ぷうっと膨れる一意に構わず、透は一意の髪の毛をくしゃくしゃに掻き混ぜた。

「子供やん」

「なんでや？」

「声を掛けられる本当の理由が分かってないから」

「本当の理由ってなんやねん」

「まあ、そういう事は自分で気付くもんだからな」

もう少し、突っ込んで聞きたかったのに、こういう言い方をされたら聞かれへんやんか。透のあほ。

一意は心の中で突っ込みを入れる。

「大人ならな」

さらに駄目押しをされた。暗に、一意が子供だといっているのだ。だから理由が分からないと。

にやりと笑う透が憎らしい。

「聞かへんわ。もうええ。自分で理由見つけて、俺が大人やっちゅうこと分かせたる」

口惜しい……。

自分で気付いてやる。と、一意は決意する。

それくらい、自分にだって分かるはずだ。

「じゃあ、課題やな。そうや。賭けよう。一意が気付くか気付かないか」

「ええよ」

ここまで来て、賭けないなんて、口が裂けても言える訳がない。

今更ながら、透はずるいと思う。一意には逃げ道がないことから
いちゃんと把握していて。挙句この台詞なのだから。

まんまと乗せられた気がするが、そんなことより、とにかくは勝
てば良いのだ。

負けへんで。

一意は、そう改めて決意した。

「俺は一意が気付かない方に賭けるわ。お前は？」

「なに言うてるねん。気付く方に決まってるやろ。で、何を賭けるん？」

「何を賭けるのかって？ 決まってるだろ。もちろん一意」

「へっ？ 俺？」

一意は素っ頓狂な声をあげて自分を指差す。

「お前、あほか。なんで俺やねん。しかも、もちろんってなんやねん！」

一意の抗議も透は、全く聞いていない。話が勝手に進んでいく。

「じゃあ、期間は一ヶ月で。気付かなかったら、一日一意を好きなようにさせてもらうぜ」

思いも寄らない、透の言葉にしばらく思考が停止した。

今透は、何を言ったんだろう？

好きなようにさせてもらうぜって。

なんか、その言い方はいやらしくないか？

いやいやいやいや。

そんな考えが、一瞬一意の頭の中を過ったが、この考えこそがなんてあほらしいんだと、思う。

一瞬でも、この時点で好きないようにされたいと思っている自分が可笑しい。

透の言う好きなようにというのは、全然違う意味なのに。

きっと、部屋の片付けをさせられるか、そうじゃなければ、バイトの身代わりか、そのあたりだろう。

一意が考えたような、色っぽい意味では決してない。そんなこと、当たり前だ。

まあ、それでも良いやと、一意は自分で納得する。理由はどうであれ、透を一日独占できるのは嬉しい。

「ええで。じゃあ、俺が勝ったら、透が俺の言うこと聞いてくれるん？」

「ああ」

にやりと、余裕そうに透が笑う。

「まあ、せいぜい、頑張れよ」

なんていう余計な一言つきで。

くそう、悔しいが本当に余裕なのだろう。

その余裕の笑みを見ていると本当に腹が立つ。

さらに、もう一度髪の毛をくしゃりと掴まれて。

また、子ども扱いされたことも。

透のその余裕さも。

何もかも口惜しくて。

「負けへんで」

でも、一意にはそれだけ言うのが精一杯だった。

勝っても負けても、透と一日居られることには変わりはないが、出来れば身代わり労働ではなくデートがしたい。もう既に、負けた場合は、身代わり労働だと、勝手に踏んでいる。透とデート、しかも、自分の好きなようにしても良いのだ。

好きなようにしても良いっていうことは、キスくらいしても、許されるだろうか？

そんな考えが、一瞬頭に浮かんだ。
が、直ぐに否定した。

そんなんは、あかんに決まってるな。

そんなことをして、親友と言う今の立場を失ってしまうのは嫌だ。

「楽しみにしてるわ」

そう告げる透に一意はこくんと頷いた。

5

そんなやり取りがあつて一週間。
何事もなく過ぎていく。

相変わらず、透という時は良く声を掛けられる。
でも、未だに理由は分かっていない。

残りは三週間。

一意は少し焦っていた。

直ぐに分かると思つていたものは、さっぱり見当もつかない。
賭けをしている以上、声を掛けてくる本人に直接理由を尋ねるわけにもいかない。

「分かったのか？」

煮詰まっていると、ちょうど同じ講義を受けていた透がそう声を掛けてくる。

講義も聴かず、賭けのことを考えていたのがきつと顔に出ていたのだろう。

「……あかん。全然わからへんねん」

むうっと、一意は膨れた。

「降参するか？」

「するかぼけっ」

授業中だったため、小声で透に抗議した。

「俺に、一日好きなようにされるのが嫌なんか？」

そう告げる透の表情が、一瞬寂しそうに見えた。

目の錯覚だろうか？

「そんなんちゃう。別にそれは、ええんや。勝負に負けるのが嫌なだけや」

そう返事をする、一瞬だけ見えた寂しそうな透の表情は、もうどこにもなくて、いつもの透に戻っていた。

やっぱり、気のせいやったんやろうか？

「負けると分かってるのに？」

一意が負けるのは当然だ。と思っている透が憎らしい。

「なんで、負けるって決め付けるねん」

「それは、……」

透は一度言葉を切って、一意を見詰めた。

その、思いの外強い視線に一意の心臓が、トクンと高鳴る。

透に見詰められて、自分でも顔が火照っているのが分かる。きつとまた、耳まで真っ赤になっているに違いない。

もう、教壇で話している教授の言葉なんて耳に入ってこない。見詰めてくる透の視線の強さに絡め取られて。そこから視線を外せない。

今一意の全身の神経が、透へと向かっている。

からかわれているのだろうか？

「それは？ なんやねん」

透の視線から逃れるように、一意の言葉の続きを促した。

「一意がまだ、子供やから」

透が、にやりと笑う。

そう言って笑った透の表情は、いつものものに戻っていた。

ほっとして、体中の余分な力が抜けた。

「あほか。またそれか。理由になってないわ」

「理由は、大人なら分かることやから。充分理由になってる」

「大人なら分かるって……。俺のどこが子供やっちゅうねん」

「教えてやろうか？」

「何を？」

「声を掛けられる理由。あとは、一意のどこが子供かについて」

正直に言えば、教えて欲しいけど。

そんなことをしたら、賭けには負けることになる。

一意は、うーんと、腕組みして考えた。

しばらくして首を横に振る。

自分で気付かないと意味がない気がする。

「やっぱり、良いわ。自分で考える」

「そうか？　じゃあ、ヒントは聞きたくないか？」

それはもちろん教えて欲しいに決まってる。

「聞きたい聞きたい」

一意はうんうんと、勢い良く頷いた。

「じゃ、今日のお昼はお前の奢りな」

「えー。なんでやねん」

「ただで、ヒントはやられへんし」

「透のけち」

「なんと言われようと構わへん。ヒント要らへんの？」

「要るに決まってるやろ」

なんてやつ。

ヒントの代わりにお昼奢れだなんて。

一意は、半ば呆れて透を見遣る。

そんなことを要求してくるくらいだし、さっき見た寂しそうな顔はやっぱり気のせいだったと一意は納得した。

「しゃりないなあ。でも、高いのはあかんで」

大学の食堂にはそう高い物はないが、一意は一応一言付け加えた。

「なんや。たまには外で食べようと思ったのに。駄目なんか？」

「お前な。あほかつ。当たり前や。調子に乗るな。学食で充分や」
「仕方ないな。じゃあ、良いわ、学食で。行こう」

そう言うと、透は席を立つ。

いつの間にか、授業は終わっていたらしい。

教室には自分と透の二人だけが取り残されていた。

必修科目だったのに、授業内容はさっぱりだ。

ノートも取り損なってしまった。

「なあ、透。今の授業ノート取れた？」

「ん？ ああ、ちゃんとメモしたぜ。ほら」

見せられたノートにはきっちり、内容が書かれている。

……いつのまに。

同じように話していたのに。

透だけきっちりノートも取っているなんて。

「なあ、今日透の家行ってもええ？」

「良いけど？」

突然何を言うんだ？ という顔で、透は一意を見遣る。

「ノート見せて」

一意の言葉を聞いて、納得した表情を浮かべる。

「分かった」

「なんか、借りが出来てばかりやな」

「その内倍にして返してもらおうから良いさ」

二人は、食堂へと向かった。

お昼時間を少し過ぎて辿り着いた食堂は混んでいた。

「混んでるな」

「ああ」

席を探すためきよろきよろと周りを見渡しても、どうやら満席だ。

「どないしょ？」

いったん座った学生は、食べ終わっても中々席を立つことはない。
一意だって、いつもそうだ。

授業が始まるまでだらだらと、時間を潰している。

諦めた方が良さそうだ。

「透、この後授業ある？」

「ない。一意もなかったよな？」

「うん。このまま透の家行ってもええ？ 食堂混んでるし」

「そうやな」

「じゃあ、行こうか」

食堂を出て透と二人、歩いているところへまた、クラスメートから声を掛けられる。

以前、図書室へついてきたやつだ。

「おい、菱沢。どこ行くんや？」

「うん。授業もないし。食堂も混んでるしな。透の家へ行こうかと」

まさか、校外までは付いて来ないだろう。

そう思い正直に告げたが、次に告げられた言葉で一意は激しく後悔した。

「へー。俺も行こうかな」

驚いた。確かに、一意とは友人でも、透とは知り合いでもなんでもない。ましてや、これから行くのは透の家だ。

「なんで？」

「なんでって、行きたいから」

「透の家に？」

透の家にはなんにもないけど。

そんなところへなぜ行きたがるのか、分からない。
大体、透のことをあれほど怖いと言っていたのに。

「そいつの家って言うか。一意と一緒に居たいから」

「はあ？ なんやねんそれ」

訳が分からない。

確かに友人だが、特に特別親しい訳でもないし、一緒に居たいと言われても困る。

しかも、透のことをそいつ呼ばわりされて、思わず一意はむっとする。

そんな、一意の腕を、透がぐいっと引いた。

「行くで」

引かれて、透を見ると、突然現れた相手を睨むようにして見ていた。

表情からして、機嫌は多分最悪だ。

自分の不注意のせいで、不愉快な思いをさせてしまった。申し訳なくなる。

「うん」

きちんと断った方がええな。

ごめん、と一意が相手に謝るより先に、透が告げる。

「悪いが俺は、名前も知らないようなやつを家にあげる趣味はない」
一意の腕を掴む透の手に力が込められる。

そのまま、話しかけてきた相手に背中を向けると一意の腕を引いて、大学を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4810m/>

完全敗北

2010年10月11日19時57分発行